

忘れかけていた感謝の心

新潟県上越市立大潟町中学校

三年 五十嵐 円 香

悲しいとき、辛いとき、いつも誰かがそばにいて、私を支えてくれました。でも、私はつい最近までそれに気付かず、支えてくれる人に対して感謝できずにいました。そのことに気付いたのは今年の夏休みでした。

私は吹奏楽部に所属しています。夏休みに入っすぐに地区吹奏楽コンクールがあり、結果は金賞でした。しかし、金賞は金賞でも県大会には行けなかった。私たちは県大会出場の切符をつかむことができませんでした。失意の中、学校に戻った私を祖父が迎えに来てくれました。私が車に乗り、家に帰り着くまでの間、祖父は結果について聞くことなく、ただ、「お疲れ様。」とだけ声をかけてくれました。家に帰っても、家族の誰もが私から結果を口にするまでの間、そっとしておいてくれました。後で聞くと、私を待っている間、泣きながら駐車場に出でくる部員たちを見た祖父は、「よい結果ではなかったようだ。あれこれ聞かず、そっとしておいてやろう。」と祖母に電話をしておいたのだそうです。もしも家族の誰かが「結果はどうだった？」と聞いてきたら、私は悔しさと切なさから八つ当たりをしていたかもしれせん。祖父の、家族の心遣いが胸

に染み入りました。

思い返してみると、昨年の冬にあったアンサンブルコンテストのときも、迎えに来てくれたのは祖父でした。同じ部内の木管打楽器チームは金賞で上位大会への出場を果たしましたが、私が所属した金管チームは銀賞でした。私はそれが悔しくて大泣きました。そのときも、祖父は、そして家族は私が落ち着くまで何も聞かずに見守ってくれました。思えば、私はいつも家族の思いやりに包まれていました。どうしてそのことに気付かずに生きてきたのでしょうか。きつと、あまりに自然な心遣いだったので、それが特別なものであると気付かなかったのでしよう。

祖父だけでなく、私は祖母にも色々な相談をしたり、悩み事を聞いてもらったりしています。祖母は何も言わなくても、私の表情を見て「今日は何かいことがあったね？」とか「何かあったのかい？」と言いつつ聞いてしまいます。思えばすごいことなのに、ずっとそうだったから、つい「当たり前のこと」と感じてしまったのかも知れません。

家族のことを考えるとき、私は小学校一年生の夏に母を亡くしたことを思い出してしまいます。いつもどおりの朝、普通に、そして元気にご飯を食べて、「行ってきま〜す。」と、弟二人を保育所に送って出勤したのに。冷たくなってしまった母の姿を見ても、葬儀を行っても、信じられませんでした。親戚の人に「泣かなくて強い子だ。」と言われるほど、涙が出ませんでした。でも、二学期に入り、クラスの男子が面白半分「何でお前のお母さん、死んだんだよ?」としつこく聞いてきました。そのときになって、ようやく「お母さんはもういない。」と実感するようになりました。遅れてやってきた悲しみに暮れる私を、近所の幼なじみの姉弟が支えてくれたことを思い出します。いつも相談に乗ってくれた

り、一緒に遊んでくれたりしました。母のことには触れずに、ただただ優しく傍にいてくれたのは、今から考えるととてもありがたいことだったのだと思います。

これまで色々なことがあった十四年間の人生。振り返ってみると実に多くの人たちから支えてもらっていたのだと気付きました。一緒に大会に出た仲間、熱心に指導をしてくださった顧問の先生、色々相談に乗ってくれた友達、担任の先生、親戚の方、近所の方、そして家族。それが特別なことだと意識せずに生きてきてしまったけれど、それに気付いた今からでも、周囲の人たちに「ありがとう。」という感謝の気持ちを伝えるのは遅くないと思います。これからは感謝の気持ちを忘れずに生きていこうと思います。そして、辛く悲しい思いをしている人を見たら、自分がしてもらったようにさりげなく寄り添い、少しでも力づけていきたいと思っています。

でも、たった一人、直接向き合って感謝の気持ちを伝えたり、寄り添ったりできない人がいます。八年前に亡くなった母。私を、そして弟たちを常に見守り、慈しんでくれた母には感謝してもしきれません。もう直接親孝行をすることはできないけれど、私が周囲への感謝の気持ちを忘れず、支え合って真つ直ぐ生きていくことで、母に思いが届くというなど思っています。

いつも一緒にいる幼なじみ、家族…。だからこそ、辛いときなどに支えてもらっても当たり前前に感じ、感謝することができませんでした。小さなきっかけでそれに気付くことができても良かったです。今は、母が亡くなったことをからかった男子にも感謝したいと思います。これからは感謝の気持ちを忘れず、生きていこうと思います。